

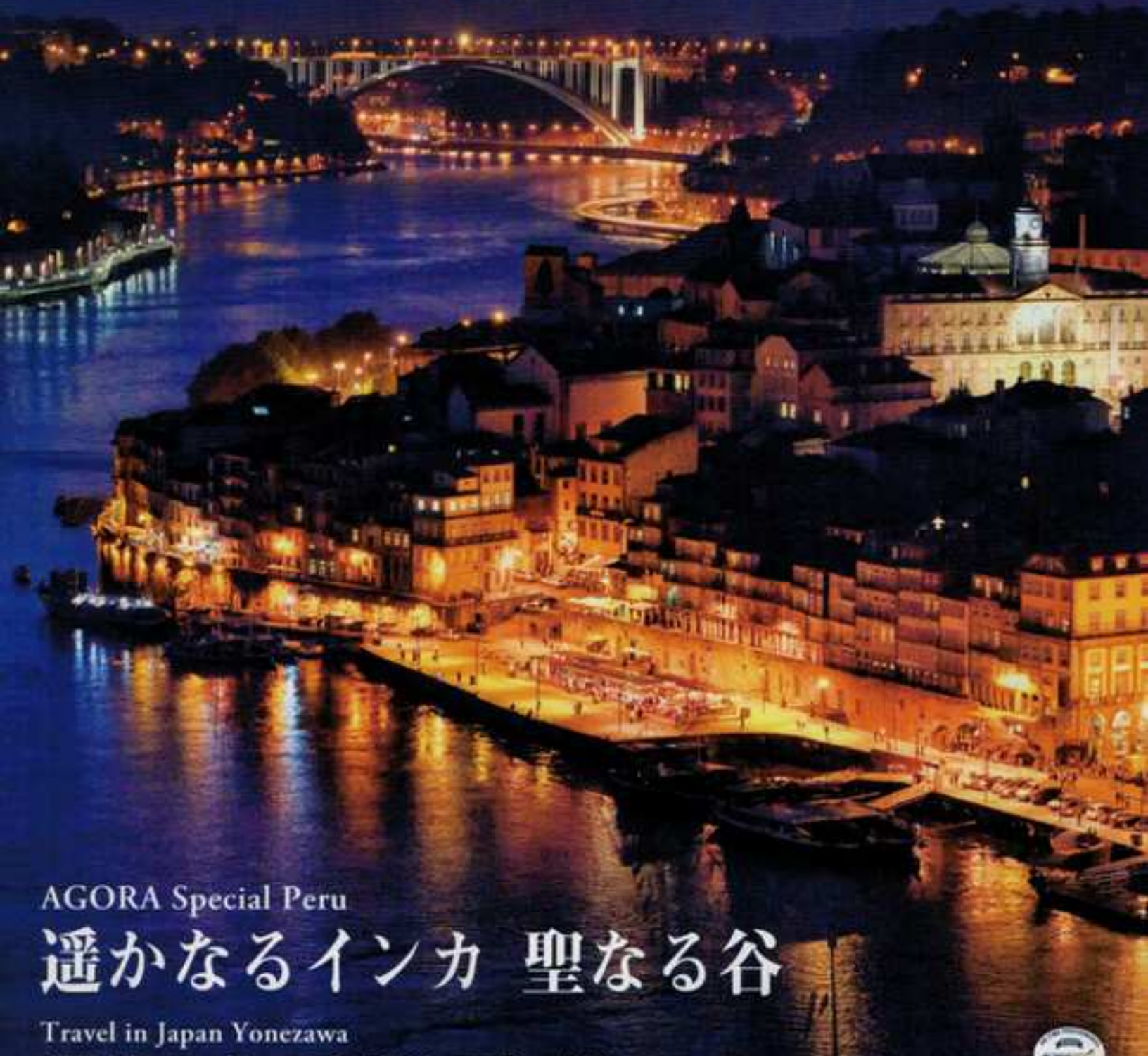
AGORA

アゴラ
The Executive
Lifestyle
Magazine

12
December
2016



JAL
JAPAN AIRLINES



AGORA Special Peru

遥かなるインカ 聖なる谷

Travel in Japan Yonezawa

鷹暮らす、雪灯り城下町



AGORA Special Peru
AGORA Special Japan Yonezawa

新

間

Miya Shinma

調香師

| Paris |

美

也





表紙の言葉
 ゴルトガル [ゴルト]
 ヨーロッパの旅の途中、どうしてもゴルトに行きたくなってリスボンから車で北上。街の入り口の小高い丘に着いたのがちょうど夕暮れどきでした。ドウロ川沿い、人々が行き交う遊歩道は温か下なのに、小さな家路が広場で奏でる音色はこんな高台まで立ち昇って聴こえてきます。その旋律に合わせてかのように、夕陽はゆっくり穏やかに沈んでいきました。
 小林葉宜 = 撮影
 Photo by Yasuhiro Kobayashi

Contents

12 AGORA Special ベルギー

遥かなるインカ 聖なる谷

田中克佳 = 文・撮影



2 市場に恋して
 ブログリ広場のクリスマスマーケット
 編集部 = 取材・文 松水 学 = 撮影

World Scope

7 [ロンドン] 誰にでも道は開かれる
 9 [キャンベラ] ギャップイヤーのすすめ
 11 [ホーチミンシティ] カフェの時間

22 Cosmopolitans われら地球人

新聞美也 講義録

編集部 = 文 山下 都 夫 = 撮影

30 BIZ TREND ビジネストレンド
 「セレクト」のこれから
 吉原 徹 = 取材・文 岡本 寿 = 撮影

37 CAPTAIN コックピット日記
 滑走路の標識

39 Souvenir みやげ上手は旅上手
 スイスパインのオーナメント
 鈴木 博 美 = 文 角田 進 = 撮影

41 Pop of Colours 男達の色彩
 琥珀色のモルト、古希の夢
 吉岡 幸 雄 = 文 小林 康 浩 = 撮影

43 時計の時間
 シャツのオーダーで
 大切なことは?
 松尾 健 太郎 = 文 岸田 克 法 = 撮影

45 EDITOR'S EYE 2
 レモン・キャンディ
 編集部 = 文 渋谷 一 = 撮影

52 うつわのなかの12か月
 「歳暮」野崎 洋 光
 露本 萌 子 = 構成 久高 昌 史 = 撮影

54 たおやめの御酒
 酒千歳野 長 野
 中津 尚 麻 子 = 文 ミヤジ シンゴ = 撮影

58 Local Specialties
 愛しき町の、ローカルフード
 天然醸造 秋田味噌 五号蔵 秋田 縣
 こんどう みほ = 文・スタイリング 古市 和 典 = 撮影

60 Travel in Japan 日本紀行

鷹暮らす 雪灯り城下町

米沢
 内真 美 希 = 文 水田 忠 彦 = 撮影

71 ここへ行きたい
 「シェラトン・グランデ・オーシャンリゾート」

106 AGORA Information
 FLY with JAL

74 JAL インフォメーション
 76 JAL コーディンフォメーション
 82 JAL トラベルインフォメーション
 95 AGORA ショッピング



東京2020オフィシャルエアラインパートナー



JALは東北を
応援しています。

香りによって記憶が呼び覚まされる。
 そんな経験をお持ちではないだろうか。
 脳と密接に関わる嗅覚は、五感の中でも特別な存在。
 その効用は医学の分野でも注目されている。
 香りで幸せを選びたい——。
 一人の調香師の思いは、大きく羽ばたこうとしている。

水崎彰子=文 山下郁夫=撮影
 Text by ACOBA Photo by Issa Yamashita

Profile


静岡県生まれ。
 京都外国語大学でフランス語を専攻。卒業後は静岡の企業に就職するが、
 香りの世界に興味を持ち退社。
 1997年—渡仏。パリの調香師養成学校サンキエーム サンズに入学し、
 調香師の第一人者、モニック・シュランジェに師事。
 2年間の課程を修了して帰国。
 静岡で調香のカルチャースクールを立ち上げ、講師としても活動。
 1999年—オリジナル香水5種を製造し、
 パリの老舗百貨店ボンマルシェで販売がスタート。
 翌年、「Miya Shinma」ブランドを立ち上げる。
 2003年—「サンキエーム サンズ・ジャボン」を創設。
 現在はパリのアトリエを本校とする「アトリエ・アローム・デュ・パルファン・パリ」として、
 新聞の思いを継承する認定講師により、数々の講座が日本で開かれている。
 2015年—世界展開に向けて香水瓶、パッケージを一新し、「Miya Shinma PARFUMS」に。
 2016年—11月より日本販売開始。
<http://miyashinma.fr/jp/index.html>



葉



数十種の香料を数滴ずつ混ぜ合わせ、イメージする香りを作り上げていく。

Cosmopolitan  Myo Shima

記憶を香りで
呼び覚ます



(左)パリのアトリエでは、依頼者が求めるイメージに合わせて、オーダーメイド香水を調合(※予約)。 (右)自然をテーマとした10種のオリジナル香水のひとつ、『みずいっしん』は、京都から取り寄せた数種の薬用養生地からお客様に選んでもらうそうだ。

「あなたが幸せを感じる場面を思い出してみてください」

穏やかな微笑みとともに、新聞のカウンセリングが始まる。季節、場所、状況など、依頼者が描くイメージを丁寧に聞き取りながら、幾種もの香料を合わせて試作を繰り返し、幸せの記憶を香りに仕立てていく。

「例えば私の場合、大学時代を過ごした京都・広隆寺側の、紅葉の木が連なる通りを歩くのが好きでした。秋はもちろんですが、初夏の光に緑色の葉がキラキラと輝く美しさは気分も高揚させてくれます。」



それぞれの香料の割合を引き出しひとつに融合していく過程は、これまでの知識と嗅覚としての感性が試みられるとき、
全神経を研ぎに集中させて、生まれてくる香りとお話に向き合う。

また、故郷が静岡県ですので、緑茶には特別な思いがありますね」

初夏の陽射し、緑の葉、樹木、緑茶……、異なる香りが、新聞の手にかかる魔法がかかったように融合され、世界でひとつのオーグーメイド香水が出来上がる。植物から採取される天然香料だけでも数百種、合成香料を加えると数千種に及ぶ性質を把握し、それぞれを構成する分子の特長を足し引きしながら、イメージする香りに組み立てるのだ。

「料理のレシピ作りのようなものですね(笑)。このスープには何が含まれているのかと考えるながら、必要な素材を揃えていくのです」

どんな香りであろうと、嗅覚だけで処方箋を作り上げてしまうのが、調香師・新聞の手腕なのである。

「朝起きたら、まず前日に作った香りのチェックをするようにしています。鼻が疲れていないので、より敏感に状態の変化を嗅ぎ分けることができますからです。香料の割合も、周囲の匂いを消して午前中に行っています」

パリ市内にあるアトリエには約1000種の香料が保管されており、白衣を着て一滴一滴ピーカーに垂らす姿は、まるで化学者のよう。日本の会社から化粧品などに使用する香り作りを依頼されることも

多く、例えばフランスで長年バラを研究し続けている名門、メイアン社が開発した新種のバラを嗅ぎに行き、その香りを再現するというような仕事もあるようだ。

一口にバラといっても、世界中には数万種が存在し、同じ品種でも気候、土、育て方によって香りは異なってくる。その微少な差を表現するのは至難の業。技術力だけではなく、これまでにない新しい香りを確立する表現力が求められるのだ。

「調香師が、芸術家、といわれる所以ですね。掲げるイメージを『香り』という形に創造し、唯一無二の作品へと育て上げていくからです」

だがそこに行き着くまでには、何百回という気が遠くなるほどの試作と試臭が繰り返され、その都度、数十種に及ぶ香料の配合比や分量の調整が行われる。孤独と忍耐との闘いだ。また香りは、香料を構成する成分の揮発性によって時間の経過に伴い変化していく習性を持つので、その推移も追わなければならぬ。探検で構成成分のバランスが

崩れると、香りの余韻が悪臭になる恐れもあるからだ。さらに商品化する場合には、香料や瓶のコスト、香料規制の適合調査も必要となる。

「近年においては、売れる香水を作るために各ブランドはマーケティングに力を入れていますので、芸術としての香水を作りにくくなってきたというのが実情です。ですが、香りの本場フランスでは、人気を重視するよりも自身の嗜好や感性にこだわる人が多いので、小さなブランドが個性豊かな香りを発表しています。私がパリにアトリエを構えてオーグーメイドの香水を作るのも、そうした香りを文化として捉える地盤に基かかっているからなのです」

新聞が調香師の勉強をするためにフランスに渡ったのは、一九九七年のこと。今でも妹に笑話にされるが「じゃ、ちょっと行ってみるね」と、二、三日の国内旅行に行くかのような気軽さで家を後にしたという。当初は香りの仕事に就くなんて、考えてもいなかったからだ。



Cosmopolitan Miss Shiro

自然が奏でるメッセージ



（上）天然香料が入った色とりどりの瓶は、香りから連想される自然の場に並べられている。（下）香水のボトルやラベルのデザイン、展示会ブースの構成なども自ら提案。香りから発信される世界観を大切にしている。

香料会社の担当者と新製品について打ち合わせ「ムスキーでバウグリアック」など、香料の特質は独特に表現されるので、仕事を始めた当時はその深い切りを懸命に勉強したという。



夫婦で近所のマルシェへ買い出しに。店主と会話をしながら旬の食材を入手できるのがバリ生活の醍醐味。

Cosmopolitan  Miss Shiras

香りの力で豊かな人生を

大学卒業後、大企業で重役たちに囲まれた職場に配属となった新聞は、自分の意見を発する機会も少なく、どこか抑圧されたような生活を送っていた。そんなとき、ふと目に留まったのが、「香りの創作は、オーケストラのシンフォニーを作曲するのに似ている」というフランス人調香師の言葉だった。小さいころからピアノを習い、作曲も行ってきた新聞にとって、その言葉がスーッと心の中に染み渡っていったという。

「香り」だったら、自分も何かを表現できるかもしれない――。

間々とした日常から飛び出すべく東京まで講座に通い始めた新聞は、香りの世界にどんどん引き込まれ、その思いから一通の手紙をしたためる。以前、イタリアのワイレンツエを旅した際にオーダーメイド香水を作ってもらった調香師に指導を請う内容だった。その彼が自分よりも適任者がいるからと紹介してくれたのが、バリで教鞭をとっていたモニック・シユランジュ、女性調香師の第一人者だったのだ。新聞の情熱が、幸運の女神の前髪を揺らしたのである。

だが男性調香師たちによって歴史が築き上げられてきた香りの世界は、女性にとっては未だ狭き門。まして、日本の女生徒を受け入れるのは学校にとっても初めてのことであり、化学用語など専門知識を要



1. 香りの道に進むきっかけとなった趣味のピアノ。嗅覚以外の感性を磨くことが、より豊かな香りを生み出す原動力になるという。2. 料理好きな夫の本日のメニューは、ズッキーニのスパレ。3. 長年の親友、シルベット夫妻宅にお泊りを受けて、彼女の店に新調の香水を置いていたときには、サクジアラピア王家のプリンセスにお褒めいただいたそうだ。

する講義のハードルも高かった。さらに香りに対するフランス人との感じ方の差も、他生徒とイメーヂを共有し難い悩みとなった。日本では爽やかな香りの代名詞であるレモンは、洗剤みたいと嫌悪されたり、神聖な木の香りには謎めいた印象が抱かれたりしていたからだ。そんな多くの課題に立ち向かう新聞を支え、補講を行うなど便宜をはかってくれた恩師、モニックには、感謝の言葉もないと振り返る。

「先生は、情熱を持ち続けること、の大切さを教えてくれました。その恩返しが出来たらと、学び舎「サンキエームサンス」(日本校の立ち上げを提案し、パリで日本人生徒に向けられた講義をしてみよう)が出来ました。先生の意思を継いで、日本でも香りを学ぶ人々を応援していきたいと思っています」



(上) 外国人に人気の香り「SAKURA(桜)」、(下) 新聞社の雑誌に花の香りをついた新装オリジナルのフレグランス。

「フランス人は歯磨きのごとく香りを身につける習慣がある」といわれることがあるが、大袈裟な話ではなく、10代から自分用の香水を持つのは普通のことだ。店頭には子ども用の香水まで並んでいるという。

「キヤンディのイチゴと木物のイチゴの香りの違いを理解できるように、フランスでは、家庭で親が子どもに香りの原形を教える習慣があります。絵画や音楽のように、小さいころから本物に触れて五感を鍛え、それを自分の言葉で表現することを大切に考えているからです」

心地よく感じる香り意識すること、自分は何が好きなのかを知り、自分らしさを表現できる香り、こだわることになっていく。だが、協調性を求められて育つ日本人は、香りにおいても流行や休足を消すといった、個性が際立つことを抑える

傾向がみられるようだ。狭いオフィスや満員電車、食材の匂いを大切にする和食店など、日本には公共マナーを重視する場が多いのかもしれないが、香りを楽しむこともっとも人生に広がりができることを知ってもらえたらと新聞は提案する。

「日本にも奈良時代から受け継がれている香道がありますし、平安時代には男女間でかわす文香という艶っぽいやりとりもみられました。そんな我が国ならではの奥ゆかしい風習から和の香りを見出し、いきたいと思っていて、百人一首でもよく詠まれている月、風、花、そして桜、緑の葉をテーマにした作品が私の処女作となりました」

フランスで二年間勉強した後、故郷に戻った新聞は、情熱に任せて自分で調査した五種類の香水を自費で製造する。それを絶賛してくれた友人の薦めもあって、パリの老舗百貨店、ボン・マルシェへ持ち込んだところ、トントン拍子で話が進み、店頭に置いてくれることになったのだ。「パリには日本文化への造詣が深い外国人が多いので、和をイメージする香りが受け入れられたのだと思います」

日本の自然美を香りに仕立てた新聞の作品は瞬く間に評判を呼び、「さくら」はロシアの元大統領夫人のお気に入りになっていると頌を綴る。販売額もドイツ、アメリカ、

ロシア、サウジアラビアと多方面に拡大したことから、国境も性別も超えて日本の自然の香りを伝えたいと、「ひのき」「ゆき」「みず」の三種類を追加。二〇一五年には「つばき」「たちはな」を新たに発表した。

「嗅神経は直接大脳辺縁系を刺激することが証明されています。香りには記憶や感情を呼び覚ます作用が見られることから、認知症予防や子どもの学習法にも取り入れることができるのではないかと、活用の可能性は広がっています」

「これまでイタリアの女性から「ゆき」の香りで不眠症が改善されたという手紙をもらったり、恋人同士の幸せな記憶を香りにすること、二人の絆が強まったと報告を受けたら、新聞自身も香りの力を再認識している。

「香りは目に見えないですし、なくても生活していくことはできます。でも、今の人生をより豊かにしてくれる力を秘めているのです。いい香りを嗅ぐと、みんな幸せそうな表情になるでしょう(笑)」

「香りで幸せを選びたい」。新聞の情熱は、これからも多くの人々に笑顔を運んでいくだろう。

(敬称略)

山下都丸 Mitsy Shikano
 文筆家、香道師、香材コーディネーター、1986年生まれ。東京生まれ。香道師として活動中。香道師として活動中。香道師として活動中。

ブローニュの森にあるバガテル公園には世界の品種が咲き誇るバラ園があり、新聞も盛りを過ぎによく訪れるという。バラの産地である法郎の村には、このバラ園の姉妹園として6000株のバラを植栽し、池上に再現している河津バラ子ル公園があり、新聞もイベントのプロデュースなどを通して訪りの魅力を拡大している。また、新聞バラ世界会とともに、創刊の文楽から市場に出すことができないバラの有力産地などにも取り組んでいる。

